

真の経済再生は

—コミュニティを復活させる「里山資本主義」—



21世紀改革研究会

21世紀改革研究会

真の経済再生

— コミュニティを復活させる「里山資本主義」 —

2014年3月6日

講師 藻谷浩介氏（日本総合研究所調査部主席研究員）

21世紀改革研究会は、政治、経済、社会の生きた情報感覚を獲得することを目指し、双方向コミュニケーションを趣旨にした勉強会です。この講演録は2014年3月6日に行われた講演をもとに作成しました。文責は編集部にあります。また、小見出しは編集部でつけました。

略歴

藻谷浩介（もたに こうすけ）

日本総合研究所調査部主席研究員

1964年、山口県生まれ。東京大学法学部卒業、米国コロンビア大学ビジネススクール修了（経営学修士）。日本開発銀行（現日本政策投資銀行）を経て、2012年より現職。平成合併前3200市町村のすべて、海外59ヶ国をほぼ私費で訪問し、地域特性を多面的に把握。日本経済研究所出向などを経ながら、地域振興や人口成熟問題に関し精力的に研究・著作・講演を行う。近著に『デフレの正体』、『里山資本主義』（共に角川oneテーマ21）、『金融緩和の罠』（集英社新書）、『しなやかな日本列島のつくりかた』（新潮社）など。

左の写真を見ていただきたい。タメディア(Tamedia)という新聞数紙を中心としたメディアグループの新しい本社ビルで、スイスのチューリッヒにできた。この建物、どんな素材できているかわかるだろうか。



実は、木造建築だ。しかも釘を使わず、木を組み合わせてつくっている。いわば、法隆寺の五重の塔などの工法を採用した、日本古来の建築物の現代バージョンである。建設中の写真を見ると、鉄骨造りならば建材をH字型に組み合わせてつくるように、これもあらかじめ成形しておいて組み立ててつくる。したがって、何がすごいかというと、建築にかかる速さだ。数日もあればできてしまう。

これが近代的なCLT(Cross-Laminated-Timber)工法を使った木造建築で、厚さ5cmぐらいに切った板を互い違いに垂直に、木目を逆にして貼り合わせてつくった。互い違いに(Cross)・貼り合わせた(Laminated)・木材(Timber)。特別に硬い木材ではなく、どの森や林にでも生えている普通の木を切つて削って張り合わせるだけで、いくらでも高い柱をつくることができる。そして、ものすごく強い。普通の木造建築もしっかりした強度があるが、互い違いに貼り合わせるような技法の強度

はそれ以上、しかもすべて日本建築から勉強した。

そもそも日本には、法隆寺の五重塔のように、継ぎはぎしながら続いている世界最古の木造建築がある。なぜこんなに耐久性があるのか。日本という大変な地震国でも、どうして長もちしているのか。それは、古来の日本木造建築物は柔構造があつて、いろいろな衝撃を吸収するような仕組みでつくつてあるからだ。それをさらに研究し、写真のようにつくつたら、五重の塔の現代版ができる。しかも法隆寺の五重塔は大きな丸太がないとできないが、これだと普通の山に生えている普通の木を切って貼り合わせればできるので、木材資源を有効利用できることになる。

この工法はヨーロッパで数年前からかなり普及し始めて、今、燎原に火がついたかのように普及しつつある。特にイタリアで引き合いが多いのだそう。

イタリアは石造りの街だというイメージだが、なぜイタリアで木造建築なのか。

答えは、「地震国だから」。CLTは地震にもものすごく強い。鉄やコンクリートは破断すると、壊して建て直さない限り再建は無理だ。だから頑丈にしつかりつくるしかない。ビスが壊れば穴から外れていくわけで、50年、100年たてばきちんと立っているかどうかわからない。一方、木材を組み合わせておけば、東大寺の大仏殿のように、そう簡単に崩れない。何よりも軽い。鉄に比べて革命的に軽い。軽いかから自重で潰れることはない。間に断熱ガラスを張るから断熱性が非常に高く、エネルギーコストが非常に安い。

これは100年以上もつ建物だが、最後に壊すときになったら、鉄骨材はリサイクルできるが、セメントや他の素材の大量廃材が出る。木造建築の場合はない。なぜ出ないかというと、古材としてリサ

イクルもできるし、燃料として燃やすことができるからだ。

CLT工法は、日本経済にもものすごく大きなインパクトを与える分野だ。これが普及すると、いろんな山に生えているような、山主が放置している戦後の杉の人工林が、カネのなる木に化ける。怪しい詐欺師みたいなこと、あるいは冗談を言っているのではない。普通の杉や桧でCLT工法による木造建築物ができる。ただし間伐材ではまだ難しいが、間伐材も利用価値がないことはない。

間伐材も、皮をむいて貼り合わせてベニヤ板にする技術がすでに確立している。鳥取県の山奥には、地元産間伐材100%でベニヤ板をつくって完全に採算がとれているばかりか、事業を拡張している会社数が数年前から登場している。木造建築、林業に関する少し前までの常識が変わってきた。全く世の中が変わってきた。

何よりもこれはクールでカッコいい。式年遷宮で注目を集めた伊勢神宮の、非常に軽快な現代バージョン。これは一種の「クールジャパン」だといえる。そもそも設計したのは、2014年のプリツカー賞を受賞した坂茂(ばん しげる)という日本人の有名な建築家で、よくある話だが、フェラーリを喜んで輸入しているけれども、デザイナーも日本人なら、いろいろな部品も日本製、というのと同じように、日本の伝統技術でできるばかりか、設計も日本人であるにもかかわらず、日本にはまだ1件もCLT工法による木造建築物が存在しない。

これは民主党政権から自民党政権になって大きく前進した規制緩和のひとつではある。ようやく3階建てまでできるようになったところが、いまひとつ普及しないのは、ある意味で誤解もある。つまり、

「木造は燃えやすい」

と。ところが、燃えない木造建築物もある。燃えて危ないのだったら、タメディア本社のように、7階建ての木造物はつくらないだろう。防火加工をしている木材の場合、特にこのCLTではたとえ1000℃ぐらいで燃えても表面が焦げるだけで、建物の中まで火が入ることはない。最近の防火加工はそのくらい進歩しているし、元来、木材は燃えないものなのだ。白木は燃えるけれども、集成材は燃えにくい。おまけに断熱性がとても高いので暖かい。したがって、イタリアでは急速に普及しているわけだ。日本では規制緩和が続々進んで、近いうちにタメディアビルと同じものが建てられるかもしれない。

ただし、大きな問題がある。世の中の決定権を持っている団塊世代から上の世代が、こういうことに興味を示さない。彼らにとつての建物とは、鉄とガラスと新建材でつくったもの。木に興味がない。なぜかというところ、彼らは子どもころに五右衛門風呂を炊いた最後の世代だから、木造の建築物は「ダサイ」ということになるからだ。考え方が古いのだ。

ヨーロッパでは、木造建築と自然の中で暮らす時代になっている。一方、アジアでは地下鉄をつくって大きなビルを建てることがいいことだと思っている。特に中国はその典型だろう。さて日本はヨーロッパ型なのか中国型なのか。早く「アジアのヨーロッパ」になったほうがいいのではないだろうか。私は思うが、なかなか日本の中核層の感覚がそういうふうにはいかない。

日本では法律上、3階建てまでしか許可されない。しかし、一部施主で3階建てまでやった最初の例がこの写真の建物だ。



横浜の港北ニュータウン、センター南駅前に4階建てのショッピングセンターができた。全然木造に見えないが、2階と3階、そして一部4階の3フロアが柱からすべて木材でできている。ただし、1階は鉄筋コンクリート。規制上まだ4階建てはつくれないから、こうした構造にならざるを得ない。

中に入って2階部分まで上がってみる。木が素材なので重厚感がなく、すごく軽く感じる。さらに、構造部分が少ないから、すっきりしたビルになる。断熱性が非常に高くて暖かいし、化学物質もほとんど使っていない。ショッピングセンターなどに使っているが、そのうちにオフィスビルとか高級マンションあるいはホテルなども建てられるようになるだろう。

したがって当然、大手企業も注目している。しかし、木造建築物をかなり追求しているハウスメーカーがある一方、マンション販売会社はまだそうした行動に出ていない。世の中やはり、慣れ親しんだ鉄筋コンクリートでの建て方でバンとやったほうがもうかるし、初物というのは出したがらない。どこか地方の小さい工務店が先に行くとするが、知らない間にこれは増えると思う。施主の中で、これはクールだ、カッコいいと気がつく人が必ず出てくるからだ。

● 21世紀先進国はオーストリア

ヨーロッパは木造建築と自然生活になつていると書いたが、実は各国それほどたくさんの木材がとれるわけではない。そんな中で、非常に大きな木材の供給国がある。それがオーストリアだ。

オーストリアは人口800万人台の国(846万人、2012年)。「人口800万人台」とはどれくらいかという点、大阪府と同じぐらいの人口だ(886万人、同)。あるいは、神奈川県(907万人、同)や東北6県と同じぐらいだ。中国地方の5県より少し多いぐらいだろう。オーストリアはそういう小さな国だけれども、芸術や文化の町で豊かだし、暮らしやすそうというイメージだが、実際には大変な苦勞をしている。

東西冷戦の時代のウィーンは、西側から東側に張り出している岬みたいなどころだったので、交易を主な経済活動にしていた。いわば鎖国時代の長崎みたいなものだ。長崎は鎖国が終わったとたん、貿易港としての地位が凋落していき、その後は石炭産業で経済を立て直していくが、オーストリアは石炭が出ない。もちろん石油も出ない。何もない。輸出品としてはスワロフスキーのガラスとザッハトルテのチョコレーアとごうたごうだ。

ところが、このオーストリアは、過去10年ぐらいの間に突然林業大国になつている。日本人は林業自体を軽視しているので知らないだけだ。ちなみにウィーンには国際原子力機関、IAEA(International Atomic Energy Agency)の本部が置かれている。世界中の原子力マフィアの会議費は、ウィーンの財政に相当落ちていることになる。

ところで、オーストリアは林業大国になっているといっても、森林は国土の15%しかない。15%しかないが、年間で自然に再生される森林資源の70%まで利用が進んでいて、今100%を目指しているところだ。100%まで利用しても、年間で再生される森林資源部分の100%だから、全体として木はなくなるらない。この木から集成材、CLTその他に加工して、低層・中層建築を中心に木造がすごく増えている。

「ウィーンの街って石造りでしょ。ザルツブルグも石造りで、モーツアルトの家も石造り。ウィーンには木造のイメージがないんだけど」

オーストリア人に言わせると、ドイツ文化というのはグリム童話の世界だから、もともと森の文化で、建物といえばすべて木造だったらしい。グリム童話に出てくるお菓子の家も、そもそもは木造だ。

それなのに、産業革命のときに木を切り過ぎて、あつという間にはげ山になった。それで仕方ないの
で石造りになっただけだ。

石造りの家は寒くてしょうがない。木は暖かいので、木の家に戻したいと。したがって、オーストリアでは建築に関連する規制が緩和された地域では、6階建ての木造マンションなどがどんどん増えている。

さらに、オーストリアよりもっと森林が少ないイタリアやドイツに木材資源を輸出して、年間5000億円ぐらいの外貨を獲得している。

日本は国土の7割弱が森林だ。発展はしたが、まだ森の国なのだ。そこで問題。現在、日本の森の面積は増えているか減っているか？

着実に減っているだろうと思うのは大きな勘違いで、森の面積は年々増えている。耕作放棄地・休耕

田が森に返っているからだ。世界の人口過密国で森が増えている唯一の国ではないかと言われている。人口が減るといっているのは「こういういいこと」もある。

オーストリアは小さい国土の15%しか森がないのに、日本はかなり大きい国土の70%近くが森林で、かつオーストリアより日本は南に位置しているので日照量が多く、降水量も2倍ぐらい多い。したがって、日本のほうが森林再生にははるかに好条件がととのっている。

ところで、オーストリアは国土の15%しか森がないところの森林資源再生の7割を利用するだけで、輸出だけで5000億円稼いでいる。5000億円がどのくらいの規模かというと、たとえばロシア。日本はロシアから天然資源を輸入している。天然ガスの他にもレアメタル、白金やバナジウムなどを輸入しているが、そのロシアと日本の貿易は、最近の数字で日本はロシアに対して5000億円の赤字。一方、化石燃料を輸入している中東に対しては11兆円の赤字。つまり4000億〜5000億円の木材輸出というのは、中東(石油)にはかなわないものの、ロシア(天然ガス)と日本の収支をトントンにするぐらいのすごい額だ(ロシアは木材を買わないだろうが)。それを、オーストリア(あんな小さい国)が輸出して稼いでいるというから、日本もここに目をつけられない手はない。

ただの木ではこれほどはもうからない、CLTに加工しているから価格が高くなるわけだ。つまり、6次産業化(1次産業+2次産業+3次産業)することだ。それでは一体、どのように6次産業化しているのか。

ひとつは、若者の雇用が増やしている。最近の林業は斧を打ちつける「与作が木を切る」ような世界

ではない。「機動戦士ガンダム」にでてくるような機械を使って木を切る。もちろんプロがやらないと危ないが、本当にリアルなゲームセンター(やっている人に失礼だが)にいるかのように、ものすごい近未来的な機械を駆使して、木を切り倒していく。

そういう職業は若い人に人気が出るだけでなく、木くずが大量に発生する。CLTを使うときに、下手をすると木の半分ぐらいいむだになる。もったいないじゃないか？ もったいないことはない。製材工場であらかじめ出た木くずは利用方法がある。何に使うかというところ、燃やす。ペレットという形に加工して発電に使う。

オーストリアには、石炭もなければ石油もない。そもそも内陸国で、タンカーを着岸できるような大きな港がない。船は、ドナウ川から延々と上つてこなければいけない。河口はブルガリアとルーマニアで、その先はクリミア半島のすぐ横で、さらにイスタンブールの海峡も通らなければいけない。だから「途中にマラッカ海峡があるぞ、怖いな」というような国(日本)と比べると、はるかに恐ろしい。イスタンブールや黒海で何があるかわかったものではない。そういう状況のオーストリアは、しかもロシアからパイプラインを引いて天然ガスをもらって、国内エネルギーを賄っている。したがって、船舶輸送もパイプライン輸送も、どうなるかわからない不安定な状況にある。

エネルギー安全保障の観点からすると、少しでも自然エネルギーの自給量をふやさなければいけない。したがって、彼らは木を燃やし始めた。ペレットという木くずを成形した棒みたいなものにして燃やすが、ものすごく効率がいい。

ペレットストーブは石油ファンヒーターと同じ使い心地で、違いは燃料が灯油か木かだけ。木くずを入れておくと自動的に減っていく。燃えていく。灯油はこぼすと臭い、ペレットはこぼすともものすごく香りがいい。それを燃やして、オーストリアは水力と合わせてようやくエネルギーの3割まで自給できるところにきた。

繰り返すが、オーストリアにはIAEAの本部があるが、原子力発電所はない。実は憲法で禁止している。このあたりがいかにヨーロッパらしい。二枚腰、三枚腰だ。

「会議は死ぬほどやってくれ。ウエルカム原子力だ。しかし、オレはやらない」

と。日本人は真面目だから、こういう態度がとれない。それですぐ松岡洋右ではないが、まず中国・韓国とけんかし、次にアメリカとけんかして、よりによって一番信用できそうもない、日本の領土を奪った実績が唯一はつきり歴史に刻まれているロシアに接近しようとしたら、いきなりロシアが戦争しかけてくるのか。まさに今、そうした状況にある。日ソ中立条約を信用した1940年代の日本のような感じだ。

以上は、『里山資本主義』にも書いてある。書いた当時で、ペレットを燃やすランニングコストは、石油の半分だった。その後どうなっているかというと、さらに世界的に石油が値上がりしている。対石油比は下がっているだろう。加えて、アメリカはバブルがそろそろ崩壊する可能性があり、そうするとまたしばらく下がる。とにかく自動発生する木くずを燃やしている分には灯油よりも安い、ということが世界では起きている。

日本より森林面積がはるかに小さいオーストリアで、木造建築が増えて山に価値が戻るばかりか、

実は国土の15%しかない森林に生えている木の7割を有効利用して、かつ発生した木くずを燃やすだけでエネルギー自給率が3割程度までまかなっている。

これを日本におきかえると、東京では規模が大きすぎてとても無理だが、たとえばオーストリアと同じ規模の東北6県だけは、エネルギーの3割が木で賄えるということは100%自信を持ってできると言える。

徳島に関して言うと、四国電力はもともと過剰発電気味で電力があまっている状態なのはさておいても、東北6県に比べて人口は10分の1以下で、かつ森林の部分が極めて多いから、大雑把に見積もって5割、6割は間違いなく賄えるだろう。

木材によるエネルギー自給について、日本全体で考えてもまったく意味がない。できる地方だけやればいい。この考え方が政策にないから、なかなか話が前に進まない。たとえば業界の全企業ができる政策しかやらないという前提であるから、日本の産業政策は前に進まない。その地域の特性に合わせて政策を打たなければいけない。北海道と東北と四国と和歌山県と奈良県、それから南九州あたりは完全にオーストリアと同じことができる。中国地方も、実は降水量が少ないが、山陰側であれば可能だ。

●真庭モデル

実例を上げてみよう。『里山資本主義』でも紹介した岡山県真庭市だ。

真庭市は、岡山の一番山奥にあり、町と村を9つも合わせて「市」と名乗っているが、東京23区より広い面積に4万人しか住んでいない。そういうところで、バイオマスペレット発電をやっている。バイオマスペレット発電は、岩手県葛巻町がおそらく最初で、そういうすばらしいところを差し置いて岡山県の事例を紹介しているのは申しわけないが(四国でもやっている人はいるのだが)、たまたま元ネタがNHK広島のローカル番組なものだから、『里山資本主義』は、中国地方ばかりになっている。ただし、岡山にはすごい先進例がある。今のオーストリアと同じモデルだ。たとえば、集材材をつくって業績を上げているMという会社がある。ここではたくさんの木くずが発生している。かつては、産業廃棄物として1億4000万〜1億5000万円も支払って業者に引き取ってもらっていた。そして、ゴミ処理場で燃やされていた。

ある日、M社の社長は気がついた。ヨーロッパでは、われわれがカネをかけて捨てているものを発電に使っていると。どうやっているのかを勉強した。すると、発電にも3種類あって、薪のまま燃やしてしまう。これは効率が悪い。砕いてから燃やすチップ発電というのがあって、これはある程度できるが、細かく砕いてペレットにすると発電効率がすごくよくなる。それで思い切ってペレットにして発電する設備を買おうと。そこでM社はペレットボイラーを買った。

そうすると1億4000万円以上払って引き取ってもらっていた木くずが発電の資源に化けて、この会社で使っているエネルギーは全部その発電所で賄えるようになった。自分でつくった木の製品のエネルギーですべての機械が動くようになったばかりか、電力が余ったので売るようになり、ペレットも余ったので売るようになった。それで今、真庭市では人口4万人の1割が使っている電力が、このM社のペレット発電で賄えるようになってきている。かつハウス農家で契約して買っている人もいる。ハウス農家ではペレットを

燃やしてハウスを暖めるが、現状で灯油の半額らしい。すごく助かっていると。これはアベノミクスという
円安政策のおかげで灯油がどんどん高くなっているから、ペレット発電の採算性がどんどん高くなってい
るわけだ。

●課題はたくさんある

とはいえ、課題はたくさんある。繰り返しになるが、日本全体での政策にしてしまおうとすれば、日
本は「生コン鉄骨新建材」がベストであり、旧来からあるものは歯牙にもひっかけない。富山市に行く
と、カッコいいヨーロッパ製の路面電車が走っている。広島では昔から走っていて、市民の交通インフラとし
てすごく機能している。東京でも北区や荒川区には路面電車は機能している。ところが、日本の財界
人に「路面電車やLRT(ライトレール)をもっと増やす」と言うと、ほとんどの人は「何を言ってるんだ。
何十年前の話をしているんだ」と言うだろう。ヨーロッパに行ったことがない人も同じだ。

日本人は世界の最先端を走っているようであり、その一方では、考え方が中国人のようなどころも
あつて、今になつても高速道路をつくって大喜びしている。

「生コン鉄骨新建材」が大好きで、誰も木を使わない。つくばの試験場で耐火性、耐震性などすべてを
チェックして、当然のことながら耐火性耐震性ともに十分にあるという回答を得ているが、この行政
も業者も使わない。

とにかく木を使わないし、集成材を使えないから、木くずが出ない。木くずがないのなら、山に行つ
て木を切ってきて燃やせばいいじゃないかということで、そうやっているところはたくさんある。補助金

を使って間伐材を切ってきてチップにしたり、ペレットにしたりして燃やしているところは全国にある。つ
いこの間まで、補助金頼みのまったくダメな産業だった。

そうしたダメ産業でも実は、アベノミクス円安のおかげで、突然採算がとれるようになった。現段階
では、間伐材を切つて燃やしても採算がとれる。ただ、この変な円安はたぶん続かなくて、また円高に
戻ると思う。為替レート次第で採算がとれたりとれなかったりするのはいちよつと危ないから、できるだ
け木くずをつくりましょうよということになる。

間伐材がたくさんとれる、たとえば京都の北山崎などでは間伐材を使ってペレットをつくっていて、京
都市内の町家でペレットストーブを燃やしている人がたくさんいる。明らかに石油ストーブより暖かいの
だそうで、ましてやエアコンよりも完全に温まる。温風ではなくて、遠赤外線で部屋の空気を暖めるか
らだそう。だから、町家はエアコンではなくて、木を燃やさないととても寒くてだめだと。今なら灯油
と同額らしい。木くずではなく、間伐材からつくったペレットが、灯油と同額。だから現時点では採算が
とれている。

問題のふたつ目は、建築基準法と消防法で、また3階建てまでしかつくれない。今その法律も改正中
で、政治家は頑張っている。これは時々ある共産党から自民党まで全員賛成するという法案だ。

そしてこれは真庭市の大问题でもある。実は日本でつくっている集積材の原料の木が輸入されている
という、どうしようもない話がある。間伐材を使って採算が合うことは合うが、やはり、国産材は高
い。さらに困ったことに、高い割にあまり質がよくないケースがある。それで集成材をつくるにしても、
輸入した木を使ってやっているケースが多い。つまり、木くずはたくさん発生して燃やしているのだけ

も、そもそもその木をよそからエネルギーを使って持ってきているので、それはちよつと本末転倒じゃないか。

これは大問題なのだが、つい最近、円安になってきて、国産材と外国材の価格差がほぼ消滅してきた。今まではあまり真面目に林業をやっていたので放置していたから、あまり質がよくない。しかし、今や規模の利益があるので、ある程度林業が復活してくるし、木が売れるようになる。国産材の価格は1〜2割下がる。ちなみに今の円安の状況で国産材と外国産材の価格差はほぼない。これからまた円高に戻れば国産材は少し高くなるが、きちんと産業として成り立っていれば、実は外国産材と完全に勝負できる。

国産のお米の値段は、輸入米の7倍だ。肉の値段は3〜4倍。しかも日本の肉というのは飼料を全部輸入して食わせている。木の場合は、日本の山に生えている100%国産で、かつ1ドル77円の時ですら2割しか内外価格差がなかった。外国とそのまま勝負できる、セメント並みに勝負できる数少ない資源。もつと真面目に国産材を使いましょうよということ、今、急速に全国で広がっている。

これは気がついている人は気がついていたが、補助金がバラバラに細分化されている。集成材をつくる補助金は集成材しかつけれない、ペレットはペレット、発電は発電で、全部バラバラだった。そうではなくて、これは循環しているんだと。みんなが地元の木を使って地元でクールな木造建築を建ててくれると、それによって大変たくさんエネルギーが発生して、地域内が賄える。これは循環している。循環型というのは、縦割りに向かない考え方でもある。

この循環型の構築、これをやるのはやはり民間だと思う。ペレットをたくさん売っている地域だと、たとえばショッピングセンターは試しに真ん中に巨大な暖炉を置いて、来た人を暖められるのをつくってみようとか、いろいろな工夫を現場ではするはず。そのことによって世の中は変わっていく。やはり補助金ではなくて、民間企業の創意工夫によって変わるのだ。

大問題と書いた真庭市でも、円安になったこともあって勢いがつき、今では発電所を増強している。人口4万人だが、今年(2014年)中には市の電力の3割まで木で賄うところまで進展する予定で、さらにその次もできることになって、今度は市の電力のおそらく半分強、もしかすると10割を木で賄って、残りを売るという方向におそらく増強投資をすることになる。こうした林業を中心に据えた産業振興は急速に進んでいる。林業だけに、山奥であればあるほど進んでいるのだ。

●「カッコいい里山資本主義」とは

以上も『里山資本主義』という本に書いたことの一例だが、里山資本主義とは何なのかということについて説明しておく。里山資本主義は、マネー資本主義の欠陥を補うサブシステムのことだ。

マネー資本主義というものがあるとすると、特にオールド左翼の人や右翼もそうなのだが、極論をいうのが好きな人たちいわく、「里山資本主義はマネー主義資本に取って代わる新しい社会原理だ」と。

そうではなく、里山資本主義はあくまでもサブシステムだ。「このサプリメントをご飯のかわりになる。のむとおなかいっぱいになるぞ」というような夢の話をしているのではなく、「ご飯にあわせて一緒

に食べてくださいよ」とというのが里山資本主義だ。「善意」と「資源」と「お金」を循環させる。困り込まない、貯めないで循環させることで安心・安全に暮らす。

「お金の循環って、マネー主義資本と何が違うんだよ」、という反論が聞こえてきそう。マネー資本主義はお金の循環ではなく、お金を貯め込むシステムだ。

実は、誰もがマネー資本主義者である可能性はある。つまり、「自分が死ぬときに自分の貯金を自分史上最高にするようにする」というのが、マネー資本主義者の定義だ。企業も最近そうなっている。「キャッシュを貯めておかないと、いつ何があるかわからん」と、いつの間にか目的がキャッシュを貯め込むことだけになっている会社は大量にある。これは銀行がいけないのだが、銀行は銀行でキャッシュを大量に持っているが、貸すところがなくて貯め込むだけになっている。みんながお金をジャブジャブに持っているけれども、全然循環していない。これがマネー資本主義の特徴だ。

そして、使うときは全員でバブルな投資をして、みんなであらかた失って終わり。汚い話で恐縮だが、昔、古代ローマが減じる過程で享楽に明け暮れる貴族たちが、うまい飯が死ぬほどあるのもっと食いたいけれどもおなかいっぱいというので、吐いてまた食っていたという話が伝わっているが、同じようなことをしている人はいると思う。マネー資本主義はそういうところがある。金を皮下脂肪に貯める。運動はまったくしない。挙句の果てにバブルで失って元も子もなくして、「ああ、せいせいした、スッキリした。うれしい。よしッ、食べるぞ」、これがマネー資本主義。

ちなみに、マネー資本主義を正当化する宗教がある。貨幣数量説、いわゆるマネタリズムだ。「みんなが金を貯めると世界はハッピー!」、そのお金が回って、日銀がもつと札を刷って、皮下脂肪がジャブジャブなところにもつと油をまいてやると日本経済は再生するぞ、という謎の理屈、マネー資本主義の権化は、ものすごく危険だ。

お金以外にも大事なものはある。いろいろなものが循環することで、人間は普通に暮らせるのであって、その一部がお金だということにすぎない。私は、お金は要らないとはいっていない。ときどき逆の人がいて、「里山資本主義とは気に食わん。なぜ里山なのに資本主義なんだ」と。

もちろん、資本主義だ。なぜならば、私は普段スーツを着ているが、これらをお金で買っている。自分でつくっていない。クルマにも乗っているが、誰かがつくったのを買ったから乗ることができる。

里山にある、誰も使わなかった、今まで金銭換算するとゼロ円というどうしようもない資源を資本として使って、「お金を一部使わなくても楽しく暮らしましょう」というのが里山資本主義だ。場合によっては、レットののように、つくったものをお金にかえましょう。たとえば耕作放棄地や間伐して放置された木、それから半端物農産品はバカにならない。ものすごい数のものが捨てられている。「半端物農産品」とは、庭先でつくられた野菜などで、量が半端過ぎて市場が引き取ってくれないものだ。最近、直売所がすごく増えたので直売所に売っているケースもあるが、直売所もシビアで半端物は売れない。

人を金銭に換算するとあまりよくないが(世間ではよくやっているが)、会社を退職した瞬間に奥さんから「あなたはもう無価値、ハイさよなら」。退職しても価値がある旦那だと思われていればそんなことにはならない。

畑一枚持っているのと持っていないのでは、本当に生活費が違う。財産すべてをお金で買っている都

会の年金生活者、国民年金のみというのは最悪の状態。田舎だと国民年金のみでもけつこう暮らせる。それは貨幣換算すると数万円に当たるような半端物農産品などで生活できてしまうわけだ。さらに木を燃やすということで、エネルギーも自給できてしまう。ペレットやその手前のチップでも、もっと手前の薪ですら、最近では技術革新がすごく進んで、極めて快適な薪ストーブというのがここ1〜2年、急速に日本でも研究されている。

つい最近も滋賀県で画期的な事例を見た。段ボール箱にきれいに切り揃えられた薪が入っていて、それは地元のガス屋さんが副業でつくっている。それを庭先のプロパンガスと同じところに置いていってくれる。その箱を、薪ストーブを持つている人がそのまま薪ストーブにボンと入れると、ピツタリその段ボール1個入る。そのまま段ボールにライターで火を付けて、ふたを閉める。段ボールがメラメラメラと燃えたら自動的に薪にも燃え移るシステムになっている。そして一昼夜暖かい。

そういうことをみんなが実行してくれると、エネルギー自給率が高くなる。半端物野菜や間伐材のように捨てていたものが、場合によって高く売れると、マネーがもうかる。かつそれは地元のもので高く売れて地元を回るので、循環する。商品経済で貯金するほどは貯まらないけれども。

もっと進めば物々交換だ。みんなバカにしているが、物々交換はとても大事。田舎の人はまだやっていて、これでそこそこ生活の足しになる。東京で子育て中の人は、本当に生活費がかかって大変。一方で地方では子育て中だと、近所から集中的に半端物農産品がもらえることも日常茶飯事だ。「子どもさんたくさん食べるでしょうから」と言っ、なんかいっぱいくれるのだ。これで生活費が実際に安くなるから、田舎は子育てがしやすい。都会でも人情にあつのは同じではあるけれども、たとえば半端物農産品がないから、おすそ分けのようなことができない。

子育てに関連していえば、これからオリンピックまでの6年間に東京都もどんどん人口が減っていく。2010年から2020年までの10年間で、東京では44歳以下が2割減る。そして70歳以上だけが37%、57万人も増え、その一方で若い人が急速に減少していつ、高齢者の街になっていく。

年をとった人は元気だ。少し郊外に足を伸ばすと、空き家が増えていつているのがわかる。その空き家がゴミ屋敷になっているところもある。そのうち次第に世代が交代して、土地にこだわっている人たちが亡くなっていく、土地にこだわりのない、その土地で恩恵を受けた経験ゼロの私みたいな世代が土地を持つようになれば、税金取られているぐらいだったら近所のNPOに無償で貸して市民農園にしたほうがましだ、と。どんどん近所で里山資本主義ができるようになっていく。

里山に移り住まなくても、里山はすぐそこにまでやってきている。たとえば多摩ニュータウンにしても、もともとが里山だったし、高級住宅街と思われている世田谷にしても、そもそもは農地だったから、昔に回帰するだけだ。

そういう、すぐそばの里山で畑を耕し、自給する野菜のほかに半端物農産品が生まれて、ご近所の赤ちゃんを育てている人がそれらのおこぼれにあずかるという、全くGDPには貢献しないけれども、社会的に言う安全・安心がきわめて増した社会が実現する。

私が「里山資本主義は保険だ」と言っているのはこうしたことだ。なぜ保険かというと、里山資本主義がどれほど普及したにしても、資本主義の世の中で得られるすべてを自給自足ができるわけではない。す

べてではないが、あつちとこつち、メリハリがつけばいいわけだ。子育て中の、がんばって平均より1人余計に生んだ人の食費が少し減るとか、退職して特に年金が少ない人の生活が、生活保護に行く前に自給自足で何とかなるとか、マネー資本主義でいえば非常に危ないところに集中的に里山資本主義的なものごとが普及することによって、わずかなことでも大きな変化が起ころう。

年寄りで農業をやっている人ほど元氣だというのは、統計上はつきりしている。若夫婦が田舎に移って子育て中心に生活をするとき、東京に住んでいるのに比べて明らかに1人ぐらい子どもが増える。物々交換しようと思うと、相手と会話せざるを得ない。昔は祭りがその機能を果たしていたわけだが、都会にはない。都会で農産物の物々交換が増えるというのは、人と人とのつながりをつくることにおいても、とても大事なことなのだ。

東日本大震災が起きたとき、仙台など被災地では物流が何週間か麻痺していた。しかし、東北地方の大きな特性が生かされた。仙台市民は都会の人に比べて、親戚から米をもらっている率がすごく高かった。冗談みたいな話だが、家に米が1年分ある家が結構あって、それをお互い分け合っていたから、仙台市民に餓死は出なかった。薪になる木はそこらあたりにいくらでも生えているし、仙台はどこにも湧き水と川があつて、広瀬川の水も飲める。隅田川と広瀬川の最大の違いだろう。それでいざというときに、みんなしばらく野外生活で何とかなる。「こういうのは実は大事でしょう。保険ですよね」というのが里山資本主義であつて、そのひとつの典型的な例であり、かなりマネー的にももうかっているのが、前述した森林をベースにした新しい動きになっている。

すでに気がついている読者もいるだろうが、マネー資本主義には限界がある。限界の最大のものに、簿外資産がある。今のところ帳簿に載っていない資産のことだ。お金に換算できるところにしか興味がないばかりか、「とりあえず、今年の四半期の私の持っているキャッシュを増やします」という目先のことのみが目的になっている。現にTMK(特定目的会社)がわかりやすい。いつの間にか誰かにトンチキなものをおまえ、それはいい会社だ」と押しつけられて、本来の目的を見失っているところが多い。私の故郷もそうで、これはものすごい問題が起きる。

とりあえず目先だけでもうけるといふ一番簡単な方法は、誰のものでもないものを奪ってきて、金にかえることだ。化石燃料が最たるもので、地面に埋まっていた石油をどんどん掘り出してきた結果、価格もどんどん値上がりする。どれぐらい値上がりしているかという点、2013年はアベノミクスで27兆4000億円。ちなみに、ある内閣のころは17兆4000億円しかなかったため、10兆円増えている。震災の2011年では21兆8000億円。震災のときは増えたけれども、その後がもっと増えている。

これは、原子力発電所を止めたからなのか？

原発を止めたから石化燃料の輸入が増えたと解説するのは、大いに間違っている。そもそも日本の化石燃料の輸入量は、ピークは2003年。そしてリーマン・ショック(2008年)のときにガクンと減ったが、やがて景気回復してきて少し増える。2011年に震災が起きるのですが、震災の年は横ばい。

みんなうそばかり言う。調べもしないで適当なことを言うというのは、社会が北朝鮮化していく大きな元凶だ。世の中のテレビに出ている評論家や政治家がいいかげんなことばかり言うから、一般の人たちが、「原発を止めたから石油の輸入が増えて、国富が流出している」というありもしない理屈で大騒

ぎになる。

化石燃料の輸入量は横ばいだが、輸入額が激増するわけだ。なぜかというところ、輸入単価がすごく上がっているからで、しかもそれは原発が止まったから上がったというのではなく、もともと世界的にバブル状態で上がって、バブルが終わると下がって、またアメリカを中心にしたマネー資本主義のバブルでまだまた上がる。

さらに、日本が天然ガスや石油を高い値段であわてて調達してしまったから、世界的な値段がどんどん上がっていく。だから21世紀に入る頃、たったの8兆円しかかかっていなかった石油輸入額が、3倍以上の20兆円ほどになる。これで日本が大赤字に陥っていなくてまだトントンであるということ自体が奇跡。大したものなのだ。

実はもつといくらでも減らせる。冒頭のような木造建築もそうだし、鉄筋でもいいのだが、現代の断熱工法で建物をきちんと建てれば、エネルギーの使用量は減る。というのも、日本のエネルギー使用の実に半分は建物のエアコンと照明、つまり光熱のために使われているのだ。ある元東大総長は、家とオフィスビル、ホテルを断熱改修するだけで8割ぐらい減らせると言っている。理系の方の言うことだから、話半分に聞くとしても4割ぐらいは減らせる。

しかも断熱工法で建てかえると、土建、建材、鉄鋼、セメント、みんなもうかる上に、さつきみたいに木材、田舎ももうかる。大変すばらしい景気刺激策だ。

これが日本の問題で、これらに対して対策を打つべきで、中国にけんかを売るとか、韓国企業と戦うとか、そんなの二の次でしょうと気がつきそうなものだけれども、数字を見ていないから全然気がつかない。

●食糧事情と少子化問題

もうひとつ。日本の食糧輸入額はいくらかというと、5兆円弱だ。化石燃料輸入が27兆円になった一方、カロリーベースの食糧自給率が4割を切っている日本の食糧輸入額はたったの5兆円弱だ。

日本の石油・ガス・石炭の輸入が、20年前の1994年では4兆9000億円だった。たかだか20年前、化石燃料輸入はたったの5兆円ではなかった。石油ショックの影響で省エネ対策として引き締めたと言うけれども、実はジャブジャブ油を使ってよかった。

ところが、4兆9000億円が27兆円になったので、さすがに産業構造上もたない。しかしこれは工場の問題ではなく、石油を一番使っているのは建物の光熱費なので、日本は住み方を変えないとしようがない。幸いなことに、偶然にも木のテクノロジーが異常に進歩した、しかも南海トラフ巨大地震が来そうなので、ここで耐震性の高い建物にかえていかなければいけない。タイミングよく、ニーズがすべて一致しているわけだ。

石油の輸入額は、20年で5兆円から27兆円になった。日本の食糧輸入も5兆円から、20年後に27億円になっている、とは誰も言い切れないが、今の5兆円が10兆円ぐらいになるなんていうのは十二分にあり得る。まさに、世界的に食料が足りないからだ。

みんなが豊かになって肉を食べると、今までヒトの口に入っていた穀物がウシの口に入るようになって、生産性のすごく低い形で肉になる。それをさらにみんなが取り合っていく。そういうやり方を続け

ていくと、確実に農業産物が足りなくなる。だから、今のものすごく安い値段を前提に日本の農政を考えるのは、絶対にやめたほうがいい。5年、10年で全く価格体系が変わる。何が起きるかということ、日本の農業はどんどん採算がとれるようになる。間違いなく、化石燃料はどんどん値上がりするが、山の本を燃やすのもどんどん採算化してくるわけです。日本の森林は、それだけの力を残しているのだ。

ところが、大問題は子どもが減り過ぎたということだ。あまりにも子どもを減らし過ぎた。子育てを犠牲にして、とにかくお金が大事、と働いてきた。日銀が札を刷れば、経済はかすすべての問題は解決すると考えてきた。

一家に帰らない企業戦士が増えたから、急速に子どもが減っている。共働きがいなくなつて専業主婦が激増して、男性が家に帰らなくなつてから、ものすごい勢いで子どもが減っている。共働きが増えたから子どもを作らなくなつた、と、特に戦前生まれの男性が思っているのとは、まったく逆なのだ。少し考えてみればわかることで、戦前生まれの人たちが子どもの頃はお百姓さんがほとんどで、ほぼ全員共働きで、全員家にいた。だからものすごく子どもが多かつた。

マネー資本主義は、人間の営みを壊してきた。お金をバラマキさえすれば何とかなる、お金を稼ぐほうが偉い、という思考法になるからだ。そうなるかどうか。やり方がズルだろうが詐欺だろうが、法律で捕まらなければ何でもいい。一言でいうと、「価値のないものを高い金で売りつけて逃げたやつが一番偉い」という経済になる。「宝くじに偶然当たつたやつが偉い」という考え方になる。これはアメリカ

の一番おかしいところ。ある一人の成功者がいたとする。彼が成功したのは、飛び抜けた才能があつたからではなく、偶然成功しているにすぎない。同じような能力・条件の人がどんどん失敗しているわけだ。偶然成功した人間だけが偉い。つまり、あなたが生み出した価値よりも手に入れた価値が高いほうが偉い。アメリカの企業であれば年間40億、50億円もの給料もらっている人がいる。そんな価値が、一人の人間にあるはずがない。それどころか何百億ももらっている人がいる。明らかにその人の労働価値よりも高い金を手に入れている。そのほうが偉いんだという、この考え方が腐っているのだ。

●ご近所と物々交換

ところで、都市住民でも里山資本主義は実践できる。

まず、商店街で(少しでもまともな店があつたら、そこで)買い物をする。経営者と仲よくなつておく、と、いざというときに何かくれるかもしれない。我が家の場合、近所の肉屋と仲よしになっていたので、子どもが育ち盛りのおきはけつこう肉をもらった。かわりにいろいろと、私がついているものを差し上げたりしていた。物々交換ができる相手はとても重要だ。要するに、近所に物々交換ができる相手をつくるだけでも里山資本主義になる。その次に、特定の田舎の産品をもって絆をつくっておけば、これもまた里山資本主義となる。

もう少し進むと、近くにたくさん出てくる空き家で、農作物を育てて“自家商品”を物々交換する。そして特定の田舎にセカンドハウスをつくる。そしてしまいには移住するもよし、季節ごとに転々とするもよし。

今いる都会から田舎に移住する。2、3年たったらまた、都会に戻ってくる。気が向いたら、またもいた田舎に、と、何度でもかわればいい。「行ったら戻ってくるな」「里山資本主義なんてこと言つて、あいつすぐ戻ってきたぞ」と哄笑する。

いいじゃないか。ひとつのところに身をやつすなんて、終身雇用に縛られ過ぎなのだ。2、3年、田舎で木を燃やしてくれるだけで、日本の収支はよくなっていくのだから、2、3年でいいのだ。自由に出入りすればいい。尽くしてもしょうがないものに一生を尽くさなければいカンのか、謎の考え方に締め付けられなければいけないのか。住むところがクルクル変わっても。別に誰も困らない。

里山資本主義はサブシステムなのだ。サブシステムなので、マネー資本主義とお好きな比率でブレンドすればいい。コーヒーに牛乳を入れる、入れたくないかもしれないけれども、たまには入れてみる。たまにはミルクのほうが多くなってカフェオレになってもいい。場合によってはホットミルクで、コーヒー入れなくてもおいしいだろう。その人その人の好き好きで、そのときそのときの気分に合わせてブレンドすればいいだけだ。

サブシステムであるこの里山資本主義は、なんと国際競争を戦っているのだ。日本の貿易赤字、年間27兆円の化石燃料代が里山資本主義で減らすことができる。つまり、一人が木を燃やせば、一人分だけ赤字が減る。日本の食糧輸入は年間5兆円だが、おそらくこれから増える。一人が自給自足した分、日本の食糧輸入は減る。これをやっている人は投票に行く人と同じで、自分の分だけ政治参加している。同じように国際競争に参加している。

日本の都道府県で、国際競争を一番していないのは東京。そしてその東京において、日本語だけで論文を書いてくだらないことをいって、何一つこういうことをしていないエコノミスト、経済学者崩れが一番国際競争をしていない。

「里山に若者を引きこもらせることは世界に背を向けているのか？ まったく違う。東京のど真ん中にいるやつが一番世界のことがわかっていない。

九州に行けば、電車に乗っても中国語、韓国語、英語で車内放送があるが、東京で新幹線に乗っている人は、西日本の下関・福岡に行くまでずっと英語しか放送がない。あろうことか、英語で放送するなという苦情が毎日来るそうだ。そういう鎖国したようなところで引きこもっている暇があったら、田舎に行つてこらんさい。外国人は田舎を非常に強い観光資源として評価している。劇的に状況は変わってきているのだ。

東京こそ、今の震災復興と同様に、そのお金はすべて東京に戻ってきて、それで食べている。徳川家康は、豊臣秀吉が激しく浮かれ過ぎた生活をしていたので、東日本を開拓して自給できる国を目指した。あえて江戸に住所を移したわけだ。源頼朝も、平家が派手に貿易でもうけたところに背を向けるために、あえて鎌倉に移した。東京に来るときというのは、日本が内向きにならなければいけないときなのだ。

家康の時代から数えると、東京が日本の中心になっていいるのは長くなり過ぎた。もう少し日本は、外向きになるべき時期だ。そういう意味でも、世界に目を向けるには田舎で世界中とネットや、リアルにつながった人のほうがいい。田舎に行くと年収が下がる。家賃がすごく低いし、食費も下がるので、実は可処分所得がけっこうある。田舎で年収200万円ある人は、年間50万円分ぐらい旅行できる人が

多い。そういう人のほうが意外に世界に行っている。

●価値の再発見

「里山資本主義」というテレビ番組を撮ったときに、一人、シンガポールに住んでいるファンドマネージャーで、天才的な男がいた。私より15歳も年下で、ものすごく頭のいいイケメンで、シンガポールでファンドをやっている。生まれがパリで、ハーバード大のビジネススクールを出て、ゴールドマン・サックスに入ってニューヨークで働いていたあと、シンガポールでファンド会社を立ち上げて経営している。こういう人が、ごく最近四国に引越してきた。香川県の丸亀に引越してきた。何もない丸亀、イメージゼロ、という日本人もいるだろう。

その彼に、「なぜ君は丸亀に引越したのか」とたずねた。

「丸亀でも仕事ができる」

と彼は答える。どういう意味か。

シンガポールの会社で働いているスタッフをスカイプとテレビ電話、メールでマネージして会社を経営している。自分は丸亀に住んでいるままで、シンガポールの会社を動かして収入を得ている。

なぜ丸亀なのか？ 奥さんは日本人で、その実家があるのだけれども、奥さんもニューヨーク育ちで、丸亀に住んだことはない。ニューヨーク育ちの奥さんと、パリ生まれ、ニューヨーク・シンガポール経由の自分がとりあえず婆ちゃんしか住んでいない丸亀で、婆ちゃんと同居している。あなた、退屈じゃないのかと、再びたずねた。

「これ見てくれ、すばらしいだろう」

と見せられた写真が、家の近所の田んぼの写真だった。しかも丸亀なんて中途半端に住宅が建っている虫食い農地だ。見渡す限り田舎ではない。ただの虫食い農地を見せられて、「こんなきれいな写真見たことあるか？」

瀬戸内海の橋がかかっている本島(ほんじま)というところの写真を見せられて、「見ろよ、この島を。こんなところは世界にないだろう」と、とうとうと説かれた。

これが里山の力なのだ。この人は仕事を辞めているんじゃない。マネーゲームをしながら、そうじゃない価値観を丸亀に認めている。世界でおそらく非常に住みやすいシンガポールという街に自分が経営する会社がありながら。

世の中というのは、そういうところから変わってきている。しかし、残念ながら非常にドメスティックな東京という、とても20世紀的な街に閉じ込められた内向きの原理でものを考えていると、それに対する適応不全が起きてしまうのかもしれない。

最後に、『里山資本主義』の177ページに「高知県の収支の細目」というグラフがある。

これは、高知県が独立国だった場合に、何で稼ぎ、何で金を失っているかという分析で、日本経済研究所が岡山大学の中村良平先生のチームとつくった。

グラフが上を向いている部分は、高知県がもうかっている産業。一番もうけているのが食品を売っている。農産物だ。大手電機メーカーの工場があるので、電子部品、電気機械でももうけている。

では何でお金を失っているのか。わずかに稼いだお金を圧倒的に化石燃料代で失っている。高知県が売っている電子部品と食品とを全部合わせても油代に足りていないという、きわめて惨めなものだ。

グラフが下を向いているものに「飲料品」がある。実は高知県は野菜や魚を生で売って、その2倍の額の加工食品を県外から買っている。だから食料自給率は100になっていない。6次産業化ができていない。途上国経済だ。ロー・マテリアルを搾取されて、加工品にして売りつけられている。コーヒー豆を作っているのにスターバックスコーヒーにお金を持つていかれるような状態だ。

高知県の知事はこれを見て、対策を打った。まず、加工して県外に売ることにした。食材を生のまま出すというのはダメなのだ。それに一番反対した人が、当時の農協のドンだった。目の前で聞いていて驚いた。「私たちは加工なんてする気はありません」と断言するではないか。30代の知事の前で、60代の農協の親玉が。

そのとき、私は気がついた。資源を収奪される路線に乗っていることで生計を立てているという人間が一部県内において、その路線を変えたくない。まるで、途上国と同じ構図だ。

もうひとつ、高知県知事がやっているのがCLTだ。高知県の木は軟らかいので、いい木材として高く売れない。県内の木を加工して集成材にして売ろうということ、日本初のCLTの本格的な建築、100%3階建て建築の社員寮が最近完成した。組み立てるだけなので、なんと、つくり始めてから2日ぐらいでできたらしい。そこに社員を入れて、山奥で木をどんどん切って、CLTをつくって、どんどん燃料を自給するということを今、県を挙げてやっている。

少子化対策では、高知県では2人目から保育費無料というのを日本で初めて打ち出している。決し

てこの知事はバラマキ知事ではなくて、元財務省主計官だからよくわかった上で「ここが金の使いどころだ」ということを彼はやっている。

こうしたことを、それぞれの地域がやっつけていけばいいのだ。

オーストリアが原子力発電をやめておきながらIAEAの本部を置いているように、イデオロギーで白か黒かではなくて、うまく白と黒が混ざった状態。これを自分たちでいかにつくるかというこのバランス感覚が先進国だと思う。今のメディアでの議論は、相も変わらず右か左かで極論をやるっただけだ。

アベノミクスというのは一言でいうと、金融緩和でしかない。金融緩和は田安誘導以外の効果が無い。商品は全く売れない。商品は増えたというけれども、民主党時代より増えていない。何も効果がなかった。田安誘導は化石燃料価格の高騰でしかない。

景気が冷えてくると、「消費税が上がったからだ」と、別のことでみんな怒り出すだろう。しかし、そうではない。要するに、ひとつのことでものが片付くと全員が狂喜した時代の最後が、アベノミクスだ。そう私は信じている。白か黒かではなく、白も黒もという、合わせ技でやるべしと思う。

そして全国でも一元にやるということに、全員が狂喜した最後だ。地域、地域でやらなければしょうがない。その組み合わせでのみしか日本は強くなれないのだということにぜひ理解していただきたい。

かねてから注目していた「里山資本主義」の藻谷浩介さんに、「21世紀改革研究会」の朝食勉強会にお越しいただきました。本文は、2014年3月6日、その勉強会でご講演なさった記録を事務局でまとめたものです。軽妙な講演、「ですます調」でお話いただいた論旨をなるべく損なわずに文章に書き起こしたつもりではありますが、多少伝わりにくいところがあるとすれば、それはわれわれの不勉強のいたすところであり、お詫び申し上げます。

『里山資本主義 ―日本経済は「安心の原理」で動く』（角川oneテーマ21）は「新書大賞2014」の第1位になり、発行部数も24万部を超えると大ヒットになっています。24万部というのは本を読む習慣のある方のほとんどが手に取っているということになるのかもしれない。ともかく、大変多くの国民が読んだ本になります。

藻谷さんご自身が書いていらつしやるが、里山資本主義は経済成長を全面的に否定するという事ではなく、ただ、お金にかえられない何もかもやはり大事であるし、さらにはエネルギー問題こそ大変重要な問題だという観点から、本当の意味での豊かな経済をつくるためにはどういうことを考えていかなければならないのか。つまりマネーゲームだけで名目の数字が伸びただけではどうもうまくいかないのではないかとということでお書きになっていると思います。

私が藻谷さんを信頼しているのは、政策投資銀行勤務のときから、徹底的なフィールドワークを重視している。融資をする、しないも含めて、各地方・各地域を歩いて調査して徹底的に話を聞くこととされてきた方だからであり、地に足のついた経済論を論じていらつしやったからです。そこに、空理空論の理想論、あるべき論はないからでもあります。

2011年3月11日の東日本大震災のあと、私は政府で被災者生活支援本部を担当していました。藻谷さんは東北地方についても多くの知見がございましたので、震災の状況、これからの復旧・復興、あるいはまちづくり、再建・再生をお伺いするという事で個別にお願いしてお話をお伺いしました。そこから相当親密なおつき合いをさせていただいていたわけでございます。復興構想会議ができる時には、一番に名前を挙げてその委員になつていただいたという経緯もございます。

したがって、問題意識も共有させていただいております。たとえば、いわゆる限界集落について。地方都市の銀行の各支店では、年金の振込が他の収入、つまりサラリーマンの月給振り込みや自営業の方々の収入よりも多いという店が相当多くなつていふんです。そして振り込まれた年金の半分が使われないで残されて、その方が亡くなるときにご遺族の、つまり子どもたちが住む都会の銀行口座に移されてします。

マネー資本主義では立ち行かなくなつていふ。地方と東京と対比すると、地方ではお金が地域単位では回らなくなつていふ。あるいは、年金以外に地方の収入はないみたいな話にまでなりかねない。はなはだ危機的な状況があるのではないかという気がします。

そこで、藻谷さんが高知県を題材に話していただいたように、やはり県際収支、市際収支、村際収支というのを、各地域で調査計測し、地元産業と地元経済のあり方をじっくりと考え、再構成する必

要があるのではないかとというのが、私の最新の問題意識でございます。

これもまた、藻谷さんとお話をし、藻谷さんの書籍や記事、論文を読んで気付かされたことでもあります。

仙谷 由人

東京事務所

〒105-0004

東京都港区新橋2-16-1 ニュー新橋ビル402-1

TEL.03-5521-1021 FAX.03-5521-0150

徳島事務所

〒770-0942

徳島県徳島市昭和町3丁目1-2

TEL.088-626-1059 FAX.088-655-9130

<Homepage> <http://www.y-sengoku.com>